

4-3 SDGsで何が個人的にできるのか、何から始めるのか？

2019年のメディアで目立った言葉にSDGsがありました。持続可能な開発目標ということですが、内容的には今始まったことではありませんが、様々な分野での緊迫感が高まったということだと思います。その背景は、気候変動、生物の多様性の急変、再生可能エネルギーへの転換といったような我が国にも関係のあるものは多々あって、それへの対応があらゆる分野で問われていますが、国家間の課題でもありますが、一人一人の問題でもあると思います。

まずは、防災、自然災害との関係について考えてみたいと思います。例えば、農業・農村環境では特に少子高齢化が進んで、耕作放棄や集落の過疎化が進んでいます。もちろん盛業は農産物の生産ではありますが、その基盤である畑地や水田といったところは、洪水や土砂崩れの被害を緩和するエリアでもあったわけで、その機能は計り知れないものになっています。このようなエリアは、常に管理することが大切で、継続的に行うには人手がかかります。現状からすると、個人の管理ではなく、農村環境の価値を持続して安定的に高めるためには国全体でその意義を理解して管理すべきものになってきている状況だと思います。これを国民全体が自分たちに関係することだという合意こそが必要なことだと思います。自然災害に関する防災というのも、これと同じで、特に事前対策ということについては、当事者意識を持ってもらうということが難しく、行政任せになっていることが多く、発生して被害が出ると行政への風当たりが大きくなるという具合では困ります。防災ということも、このSDGsと同じ理念であって、いわばどの国もどの地域も同じような共通、共有した課題があるわけで、一国で成し遂げても意味がないというか全体での共通認識があっては漸近可能な目標になると思います。少なくとも、個人の問題ではないということではなく一人一人が関心を持つべきテーマであり、我々の日常の在り方が問われ、それが安心・安全な生活環境になるということであろうと思っています。

いずれにしても自然現象は人間にとっては致し方のないものではありませんが、最近の科学的知見からは、我々の人間活動がこの自然現象に密に影響を与えていることもあるようで、自然現象に負荷を与えるようなことは抑制していくようにしなければならない。自然現象が自然災害になる誘因についてのできるだけその被害を少なくするような生活スタイルにしていかなければなりません。例えば、地球温暖化についても、あらゆるところでテーマにしながらできることをしていくことや関心を持ち続けていくことは今の自分たちだけでなく次世代へ付けを残さないためにも必要なことです。先送りをしていけば、修復ができないところを超えてしまいますので、利便性をある程度停滞させても、あらゆるレベルで取り込まなくてはなりません。そのためにも、視野を広くしての考え方が望ましいこととなります。これからは機能、コストとともに環境倫理とか地球倫理的なものを両立させていくこと、生産する側も消費する側も同じ目線で考えていくものが必要となります。防災教育にしても単にどう避難するのか、どのようなことに注意すべきかということだけでなく、広い視点からの防災文化の醸成になることが求められています。